

ポルトガル語の直説法完全過去の本質的な意味機能について¹

Sobre a função semântica essencial do Pretérito Perfeito Simples do Indicativo da língua portuguesa

牧野真也

MAKINO, Shin'ya

1. はじめに：“過去”，“現在完了”，“未来完了”的な文脈における直説法完全過去

ヨーロッパの標準的な現代ポルトガル語（以下、略してポルトガル語と呼ぶ）の直説法（単純）完全過去 *Pretérito Perfeito Simples do Indicativo* は、² 語源的に対応関係にある現代フランス語の単純過去などとは異なり、言語使用域の如何を問わず、次の (1) のように過去に終結した事象を現在の状況とは関連付けずに表示するだけでなく、(2) のように現在完了的な文脈や、(3) のように現在の習慣的な事象に先行して終結する反復的な事象を表示するのにも用いられる。

(1) *Ele saiu mas voltou logo.* 「彼は出かけたが、すぐに戻ってきた。」³

(2) *Ele não está. Já saiu para dar uma volta.* 「彼はいない。もう散歩に出かけている。」⁴

(3) *Quando eu chego ele já saiu, quando ele chega eu já saí.* 「私が帰ると彼はもう出かけており、彼が帰ると私がもう出かけているのである。」

さらに日常の口語的な使用域では、(4) のように、主として文章語的な使用域で標準的に用いられる直説法未来完了に代わり、同様の時制的・アスペクト的価値をもって用いられることが多い。⁵

(4) *Amanhã por esta hora, ele já saiu.* 「明日のこの時間には、彼はもう出かけている。」

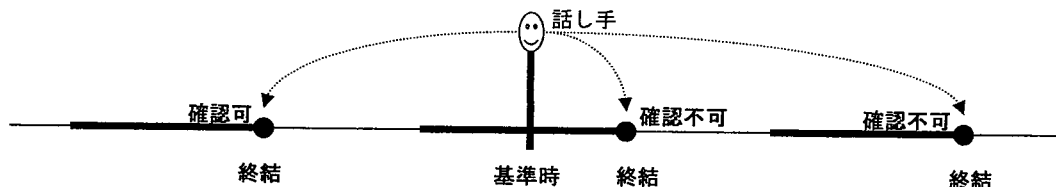
cf. *Amanhã por esta hora, ele já terá saído.* （下線は直説法未来完了）

英語との対照で言えば、直説法完全過去は *did* と *have done* の領域を広くカバーするだけでなく、口語では *will have done* の領域をも侵食しているかに見える。以下では、時制とアスペクトの観点から直説法完全過去を含む例文を検討し、さらに直説法現在との関係を考察することによって、これらの用法を支えている直説法完全過去の本質的な意味機能を明確にしたい。

2. 基本的な用法：基準時＝発話時の場合

"O Pretérito Perfeito... É, no entanto, sempre terminativo, isto é, marca um momento em que um estado ou

um evento terminou"「完全過去は…しかしながら常に終結表示的 *terminativo* である。すなわち、ある状態や出来事の終結時を表示する」(MATEUS et al. 2003: 156)。したがって、終結が確認できない事象について直説法完全過去を用いることは難しい。たとえば **A Terra girou à volta do Sol*. は意味的に適格ではないが、それは *a Terra girar à volta do Sol*「地球が太陽の周りを回ること」の終結が現時点ではいまだに確認されていないからである。さて、話し手によってある事象の終結が“確認”され、それが表示されるためには、その事象を把握するにあたって話し手が身を置く時間軸上の視座（以下“基準時”と呼ぶ）が事象終結時の後に位置していなければならない。その基準時が“事象時”（事象が成立する時点や時区間）に含まれていたり、事象開始時の前に位置していれば、事象の終結は、予期・予想が可能な場合こそあれ確認は不可能だからである（次図を参照。水平方向の細線は「時間軸」、太線は「事象時」、太線終端の●は「事象終結時」を表示する）。



以下では、完全過去を用いた事象叙述の基準時がどこにあるのか、そして完全過去と“事象の終結から生じた状態”との関係がいかなるものであるかを、述語の動作（様）態 *Aktionsart* などをも考慮に入れながら例文に即して検討していくことにする。⁶

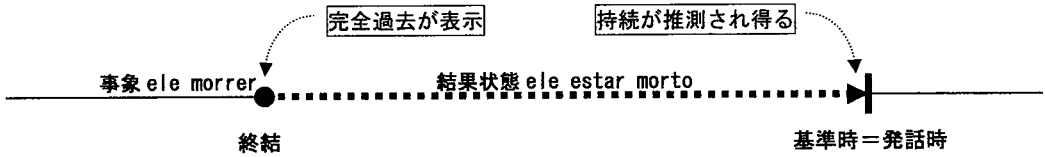
次の例文 (5) (6) は述語の動作態が“頂点到達 *culmination*”もしくは“到達 *achievement*”と呼ばれる出来事である。頂点到達はいわゆる“限界的 *telic* な事象”の1つで、⁷ “内在的な終結点（必然的な終わり）を有するプロセスの終結点そのもの”を表示する。

(5) *Ele morreu*. 「彼は死んだ。」

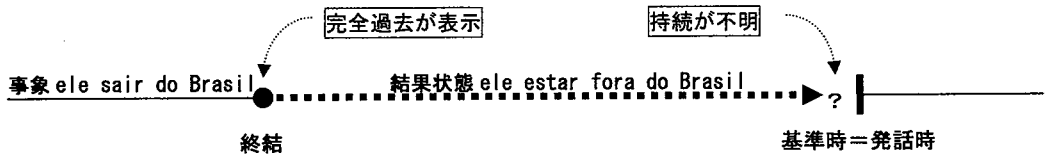
(6) *Ele saiu do Brasil*. 「彼はブラジルを離れた。」

これらの例文では、事象が有する内在的終結点への到達が基準時である発話時から確認されていることを完全過去が表示している。次に問題となるのは“事象の終結から生じた状態”がどのように扱われているかであるが、(5) では事象「彼が死ぬこと *ele morrer*」の終結から生じた結果状態である「彼が死んでいること *ele estar morto*」は、述語 *morrer* が指示する事象が通常は一生体について一度しか生じず反復不可能なので、「彼が生き返った」などの特別な状況や文脈がない限り、発話時まで成立

し続けていると“推測”されるのが一般的である（次図を参照のこと。破線は事象終結から生じた結果状態を表示する）。



他方 (6) では、事象「彼がブラジルを離れること ele sair do Brasil」の終結から生じた結果状態である「彼がブラジルを離れていること ele estar fora do Brasil」が基準時である発話時まで成立し続けているか否かは、述語 sair do Brasil が指示する事象が (5) の morrer とは違って一般に反復可能なので、状況や文脈の助けがない限りは不明である（次図を参照）。

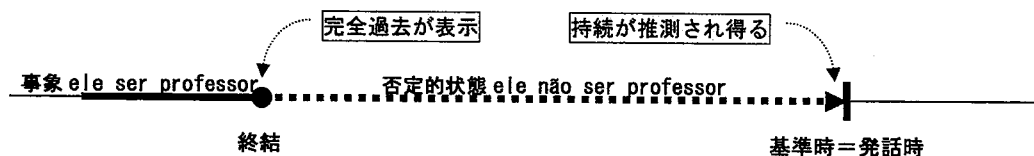


次の例文 (7) (8) は述語の動作態が“状態 state”である。状態は“内在的な終結点のない非限界的 atelic な事象”のうち、“動作的な展開性のない”ものである。⁸ “非限界的な事象である”“動作的な展開性を持たない”“持続性を有する”などの点で (5) (6) の頂点到達の対極に位置する動作態である。

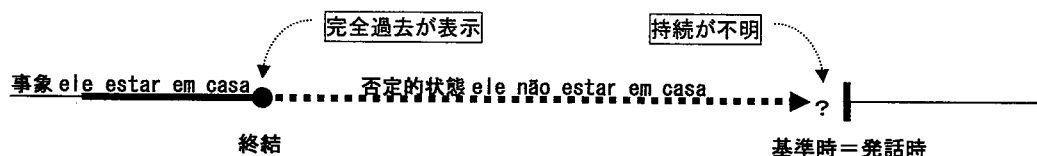
(7) *Ele foi professor.* 「彼は先生だった。」

(8) *Ele esteve em casa.* 「彼は家にいた。」

これらの例文では、本来は内在的な終結点を持たない状態に終結点が生じており（アスペクト変化）、それが基準時である発話時から確認されていることが完全過去によって表示されている。さらに (7) においては、事象「彼が先生であること ele ser professor」の終結から生じた否定的な状態である「彼が先生ではないこと ele não ser professor」は、述語 ser professor が指示する事象の繰り返しが一般に容易とは言えないので、「彼が教職を辞した後に再び教職に戻った」などの情報がない限り、発話時まで成立し続けていると“推測”されるのが一般的である（次図を参照）。



他方 (8) では、事象「彼が家にいること *ele estar em casa*」の終結から生じた否定的状態である「彼が家にいないこと *ele não estar em casa*」が基準時である発話時まで成立し続けているか否かは、述語 *estar em casa* が指示する事象が一般に反復可能なので、状況や文脈がなければ不明である（次図を参照）。



以上の例文 (5)-(8) の検討から、直説法完全過去の性質について次のような考察が得られよう。

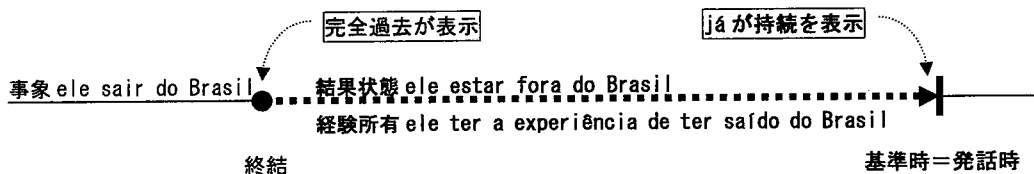
- ① 直説法完全過去により、限界的事象はその内在的終結点への到達が表示され、非限界的事象は終結点の生起が表示される。
- ② ①の“事象の終結点”は“基準時”である“発話時”から“確認”されたものである。
- ③ ①の事象終結から生じた“結果状態”や“否定的状態”が、発話時まで持続していると聞き手に“推測”され得る場合もある。ただし、それは“限界的事象”対“非限界的事象”といった述語の動作態の分類よりはむしろ“述語が指示する事象の反復可能性”や“文脈”もしくは“状況”に依存すると思われる。
- ④ ③より、完全過去そのものは“事象の終結から生じた結果状態や否定的状態が発話時まで持続することを明示する機能”（英語であれば“現在完了 present perfect”が有する機能）すなわち“完了相 perfective aspect”を持たないと考えられる。

他方、上記の例文 (6) (7) は副詞 *já* を付加すると次のような意味になる。

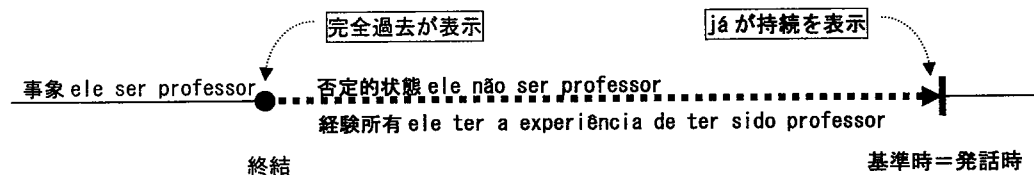
(6) *Ele Já saiu do Brasil.* 「彼はもうブラジルを離れている/ブラジルを離れたことがある。」

(7) *Ele Já foi professor.* 「彼はかつて先生だった/先生だったことがある。」

例文 (6) では、事象「彼がブラジルを離れること *ele sair do Brasil*」の終結から生じた結果状態の「彼がブラジルを離れていること *ele estar fora do Brasil*」が発話時まで成立しており、それが副詞 *já* によって“明示”されている（次図を参照）。



(6) は主語 *ele* の指示する主体が発話時にブラジルにいても使用可能で、その場合は主体の“経験”を意味する。換言すれば、事象の終結から生じた経験所有「彼がブラジルを離れた経験を有すること *ele ter a experiência de ter saído do Brasil*」が *já* によって明示されることになる（前図を参照）。同様に (7) でも、事象「彼が先生であること *ele ser professor*」の終結から生じた否定的状態である「彼が先生ではないこと *ele não ser professor*」もしくは経験所有の「彼が先生であった経験を有すること *ele ter a experiência de ter sido professor*」が発話時まで成立し続けていることが *já* によって“明示”される。



さらに、興味深いことに、英語の“*already*+現在完了”とは異なり、ポルトガル語では (9) のように“*já*+完全過去”と“過去時を明示する副詞句”の共起が可能である。

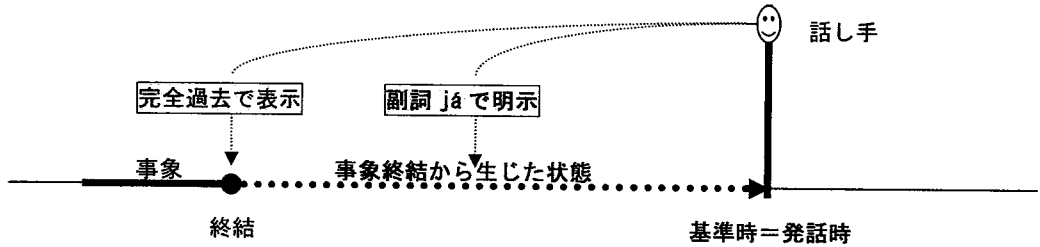
(9) *JÁ acabei o trabalho ONTEM.* 「私は昨日のうちにその仕事を終えてある。」

cf. **I have ALREADY finished the work YESTERDAY.*

つまり、事象終結の確認と具体的な終結時がそれぞれ完全過去と時の状況補語によって表示され、そして事象の終結から生じた結果状態が発話時まで持続することが *já* で明示されているのである。以上の例文 (6) (7) (9) の検討に基づき、前頁の考察①②③④に次の項目⑤を加えることが可能であろう。

⑤ 直説法完全過去が有するのは、“基準時である発話時から事象の終結が確認されることを表示する

機能”すなわち“終結相 terminative aspect”だけなので、事象の終結から生じた“結果状態”や“否定的状態”もしくは“経験所有”が発話時まで成立し続けていることを“明示”するには、副詞 *já* が用いられる（次図を参照）。



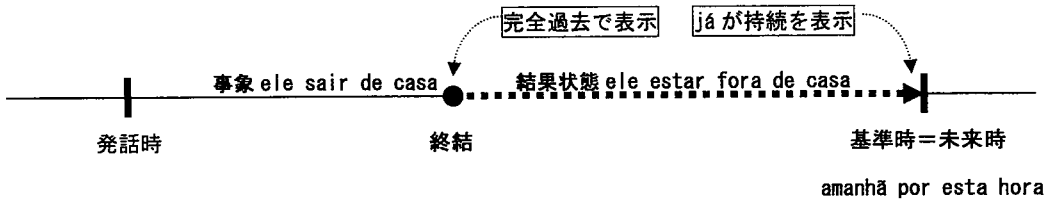
このような現在完了的文脈における単純完全過去の使用は、複合形式の直説法複合完全過去 Pretérito Perfeito Composto do Indicativo（助動詞 *ter* の直説法現在＋過去分詞男性形）が事象の終結やそこから生じる状態を表示できないため、その機能的な穴を埋めるものであると考えられる（複合完全過去はもっぱら過去時から発話時までの事象の“継続”や“反復”のみを表示する。註4を参照）。

3. その他の用法：基準時≠発話時の場合

直説法完全過去は、次の (10) が示しているように、事象叙述の基準時が発話時の場合だけに用いられるわけではない。

(10) *Amanhã por esta hora, Já ele saiu de casa.* 「明日のこの時間には、彼はもう出かけている。」

この文においては、事象「彼が出かけること *ele sair de casa*」の終結が、基準時である「明日のこの時間 *amanhã por esta hora*」から確認されると予期・予想されており、それが完全過去によって表示されている。つまり、(5)-(9) と (10) との違いは事象終結確認の基準時にある。すなわち、(5)-(9) ではそれが“発話時”であるのに対して (10) では“発話時の後に位置する未来時”であって、*amanhã por esta hora* のごとく文脈的に明示されている。さらに、事象「彼が出かけること *ele sair de casa*」の終結から生じる結果状態の「彼が出かけていること *ele estar fora de casa*」が、基準時である「明日のこの時間 *amanhã por esta hora*」まで成立し続けていることが *já* の使用によって明示されている（次図を参照）。このように完全過去が未来完了としての時制的・アスペクト的価値を有する場合、*já* の使用は義務的である。

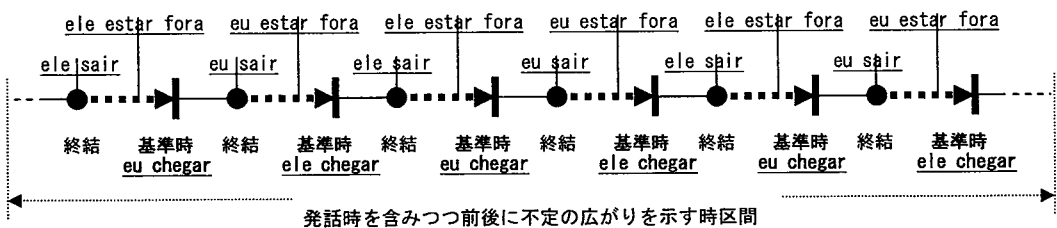


ポルトガル語にあって、直説法完全過去に対する直説法未来完了の本質的な対立的価値はその“叙法的価値”（具体的には“何らかの条件が満たされたときに事象が成立する可能性の表示”）であると考えられ、⁹ 実際には、特に口語的な使用域においては、未来完了が単なる“時制的価値”をもって用いられることは一般的ではない。¹⁰ このように口語では直説法未来完了が時制としては機能し難いがゆえに、直説法完全過去がその領域をカバーしているのであり、これが未来完了的文脈において完全過去が頻用される理由であると考えられる。

最後の例文 (11) は、基準時が発話時の一点でもなければ未来時の一点でもない場合である。

(11) *Quando eu chego ele JÁ saiu, quando ele chega eu JÁ sai.* 「私が帰ると彼はもう出かけており、私が帰ると私がもう出かけているのである。」

この文では、事象「彼が出かけること *ele sair*」の終結と事象「私が出かけること *eu sair*」の終結がそれぞれ基準時である「私が帰ったとき *quando eu chego*」と「彼が帰ったとき *quando ele chega*」に先行している。そして“*quando* + 直説法現在”が“現在の習慣的の反復”を表示するため、事象終結確認の基準時である「私が帰ったとき *quando eu chego*」と「彼が帰ったとき *quando ele chega*」はそれぞれ時間軸上の一点ではなく、“発話時を含みつつその前後に不定の広がりを見せる時区間内の不特定複数の時点”となる。さらに、事象「彼が出かけること *ele sair*」「私が出かけること *eu sair*」の終結から生じる結果状態の「彼が出かけていること *ele estar fora*」と「私が出かけていること *eu estar fora*」はそれぞれ基準時の「私が帰ったとき *quando eu chego*」と「彼が帰ったとき *quando ele chega*」まで成立し続けているが、これは副詞 *já* の使用によって明示されている（次図を参照）。



以上の例文 (8) (9) の検討から、前々頁の考察②を②'のように書き換えることが可能であろう。

②' “事象の終結点”は“基準時”である“発話時”や“未来時”もしくは“発話時を含みながら前後に開いた時区間の不特定複数の時点”から“確認”される。ただし、基準時が発話時でない限りは文脈的に明示される。すなわち、基準時の初期値は発話時である。

4. 直説法完全過去の本質的機能

2 節と 3 節で得られた考察①-⑥から明らかなのは、“文や節によって指示される事象の終結が何らかの基準時から見て確認されることを表示する”のが直説法完全過去の本質的な働きだということである。問題はその基準時であって、“発話時”の場合もあれば“未来時”の場合もあり、“発話時を含みながら前後に開いた時区間の不特定複数の時点”の場合もある。だが、これらの基準時は“発話時を含みながら前後に開いた時区間に属する任意の時点である”という点では同一である。したがって、この時区間を“非過去”と呼び、発話時を含まない時区間である“過去”と区別するならば、⑥のような結論が得られることになる。

⑥ 直説法完全過去の本質的な意味機能は、時区間“非過去”に属する“任意の基準時”から“確認”される“事象終結”の表示である。¹¹ ただし、基準時の“初期値”は“発話時”であり、基準時が発話時でない場合は文脈的に明示される。また、直説法完全過去そのものには、事象の終結から生じた“結果状態”や“否定的状態”もしくは“経験所有”が基準時まで成立し続けていることを“明示”する機能はなく、それは文脈・状況によって理解されるか、副詞 *já* によって明示され得る。

5. 終わりに：直説法現在との関係

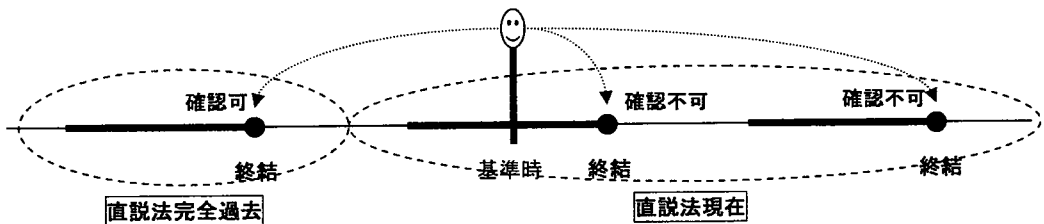
直説法完全過去はポルトガル語の叙法・時制・アスペクト体系を構成する項の1つである以上、体系の他項との対立関係を考察しなければ、その意味機能を十全に定義することはできない。ここでは、次に述べるように直説法完全過去といわば意味的な“最小対”をなす直説法現在 *Presente do Indicativo* との関係を検討することで、“非過去に属する基準時からの事象終結確認”が何を意味するのかを考えてみたい。

直説法現在と直説法完全過去は、接続法現在・接続法完全過去と対立して“叙述内容の真偽判断を留保しない”，直説法未来・直説法未来完了と対立して“条件付成立可能性を表示しない”，直説法不完全過去・直説法過去完了と対立して“事象叙述の基準時を時区間‘非過去’に属する任意の時点（た

だし初期値は発話時)とする”という点で共通しているが、前者は“事象の終結が基準時から確認されない”ときに用いられるという点のみで後者と対立し、この限りにおいて直説法現在と直説法完全過去は意味的に最小の対立をなす。

- (12) *Ele está em casa.* 「彼は家にいる。」
- (13) *Ele fuma.* 「彼は煙草を吸う。」
- (14) *A Terra gira à volta do Sol.* 「地球は太陽の周りを回る。」
- (15) *Amanhã ele vem cá.* 「彼は明日ここに来る。」

(12)(13)(14)の叙述内容は、それぞれ、“発話時に成立している状態”“発話時を含む不定の時区間において習慣的に反復される出来事”“発話時を含む不定の時区間のすべての時点において成立する出来事”であり、それゆえ、基準時である発話時からその終結を確認することは不可能である。また“確実な近未来の事象”を表示する(15)にあっても、事象が未来時 *amanhã* に確実に成立すると“予定・予期・予想”されているだけであって、やはり基準時である発話時においてはその終結は“確認”され得ない。したがって、直説法現在と直説法完全過去との関係を図式的に表すと次のようになる。



このように「事象の終結が確認されるか否か」は、主体としての人間にとって非常に重要な区分であると思われる。なぜなら“終結が確認される事象”は言い換えれば“もはや主体の働きかけが不可能な対象”であるのに対し、“終結が確認されない事象”は“いまだ主体の働きかけが可能な対象”だからである。これと同様に事象叙述の基準時が置かれる時区間“非過去”と時区間“過去”の区分も重要である。なぜなら、“過去”は“もはやそこに生きることが不可能で、主体の働きかけが不可能な世界”であるのに対し、“非過去”は“まさに生きており、これから生きることが可能な、主体の働きかけが可能な世界”だからである。つまり、言い換えれば、直説法完全過去と直説法現在の対立は“主体の働きかけが可能な世界”から見た“もはや主体の働きかけが不可能な事象”と“いまだ主体の働きかけが可能な事象”という認識上の基本的な区分を言語化したものであると言えよう。

- ¹ 本稿は日本ロマンス語学会第49回大会(北海道大学2009年5月31日)における口頭発表に基いて執筆された。
- ² ヨーロッパの標準的な現代ポルトガル語とは、今日、地理的にはLisboaとCoimbraにおいて、社会的には高等教育を受けた人々によって話され、書かれる変種(標準規範)をモデルとし、公的な場で排他的に用いられ、学校で教授され、マスメディアの発達によって全国の地域方言に影響力を増しているポルトガル語を指す。
- ³ 本稿の例文は、筆者が実際の会話やweb上で収集した実例に改変を加えた作例であるが、Coimbra大学医学部研究員Nuno Machado氏(Coimbra近郊のMealhada出身でCoimbra大学理学部卒業)、および、Coimbra市役所文化部勤務の人類学者Sérgio Madeira氏(Coimbra出身でCoimbra大学文学部卒業)によるネイティブチェックを経た適格文であり、口語的な(4)(10)を除き、他はすべて口語的な使用域でも文章語的な使用域でも標準的に使用可能であると判断されたものである。
- ⁴ 単純時制の完全過去に対し、“助動詞terの直説法現在+過去分詞男性形”からなる直説法複合完全過去Pretérito Perfeito Composto do Indicativoの用法はきわめて限定的であり、与えられた事象を、過去のある時点から発話時まで継続しているものとして、あるいは反復しているものとして表示するのがその主機能である。たとえば*Ele tem saído para dar uma volta.*とすると「彼はいま散歩に出かけている。」ではなく「彼は(近頃)よく散歩に出かけている。」の意となり、過去のある時点から発話時まで続いている反復の意で解釈される。
- ⁵ SANTOS (2003) および註3のインフォーマント2氏の判断による。
- ⁶ 述語の動作態分類としてはVENDLER (1968)とMOENS AND STEEDMAN (1988)を参照のこと。
- ⁷ ここで頂点到達について述べられていることは頂点到達過程にも該当する。“頂点到達過程 culminated process”もしくは“達成 accomplishment”(ex. *comer o bolo*「そのお菓子を食べる」; *ir ao museu*「その博物館に行く」)も限界的事象の1つであるが、これは“内在的な終結点のあるプロセスとその終結点”の両者を表示する。
- ⁸ ここで状態について述べられていることは過程にも該当する。“過程 process”ないし“活動 activity”(ex. *comer bolos*「お菓子を食べる」; *nadar*「泳ぐ」)も非限界的事象の1つであるが、これは動作的な展開性のあるもので、状態とは違って内部に休止を許容する事象である。
- ⁹ 寺崎 (1998), p.28, pp.38-43の記述を参照。
- ¹⁰ *Ele perdeu o comboio.*「彼は列車に乗り遅れた。」(事実)に対立する*Ele terá perdido o comboio.*「彼は列車に乗り遅れたのだろう。」(推測)のように、直説法未来完了は、発話時を基準時としてそこから終結が“推測”される事象を表示するモダリティ的な用法のほうが一般的である (cf. MATEUS et al. 2003: 164)。
- ¹¹ 悠久の存在でもない限り、いかなる過程や状態においても、その開始点はデフォルトで存在すると考えられるので、それは語彙的アスペクトのうちに最初から含まれていると言えよう。むしろ現在や不完全過去(フランス語とイタリア語の半過去やスペイン語の線過去に対応する)のように、これを消去するアスペクト操作のほうが有標の可能性があらう。

【引用・参考文献】

- MATEUS, Maria Helena Mira, Ana Maria BRITO, Inês Silva DUARTE e Isabel Hub FARIA (2003): *Gramática da Língua Portuguesa*. 5.^a ed. revista e aumentada., Lisboa, Editorial Caminho.
- MOENS, Marc and Mark STEEDMAN (1988): *Temporal Ontology and Temporal Reference*. In: *Computational Linguistics*. Vol.14, pp.15-28.
- PERINI, Mário A. (2002): *Modern Portuguese: a reference grammar*. New Heaven, London, Yale University Press.
- SANTOS, Diana (2003): *Português para estrangeiros: Gramática básica para alunos que já falem e escrevam a nossa língua*. <http://www.linguateca.pt/Diana/download/portugisisk.html> で閲覧可能。
- TEYSSIER, Paul (1985): *Manuel de langue portugaise: Portugal-Brésil*. 2.ème éd. revue et corrigée. Paris, Klincksieck.
- VENDLER, Zeno (1967): *Linguistics in Philosophy*. Ithaca, New York, Cornell University Press.
- 彌永史郎 (1986):「ポルトガル語の複合過去」.『ロマンス語研究19』, pp.23-33, 日本ロマンス語学会.
- 彌永史郎 (1991):「ポルトガル語の時称」.『Anais XXV (1991)』, pp.35-46, 日本ポルトガル・ブラジル学会.
- 彌永史郎 (1992):「ポルトガル語の時称体系」.『京都外国語大学研究論叢 XXXVIII』, pp.317-332, 京都外国語大学.
- 太田亨 (2000):「日本語とポルトガル語の先行性アスペクトをめぐる考察」.日本語と外国語の対照研究 VII『日本語とポルトガル語(2):ブラジル人と日本人との接触場面』, pp.93-126, 国立国語研究所.
- 太田亨 (2001):「ポルトガル語の完全過去と現在完了の機能分担について」.『Anais XXXIV (2001)』, pp.1-10, 日本ポルトガル・ブラジル学会.
- 寺崎英樹 (1998):『スペイン語文法の構造』, 大学書林.